

## 第 30 計；諦めない。執着心が凄い。(中華思想その 2)

—「中国人の価値観には 1 人は龍・ 2 人は豚・ 3 人は虫」の価値観がある。—

(—中国人との雇用契約は期限付きのプロ野球選手契約のようにしてください—)

金庸の小説“鹿鼎記”の主人公“韋小宝”のような  
芸能人志向の「専門学校」卒業者を中国担当にする？

私を感じたことで、第 16 計で書いた「中国人は仕事に関して忍耐  
力がない」と「諦めない。執着心が凄い」の価値観は一見矛盾して  
いるように見えるかもしれない。「諦めない。執着心」は中国人の人  
生をかけた戦いなのです。中国人のオリンピック選手の金メダルの  
数を見ればお解かり戴けるものと思います。「成功」と「不成功」で  
は未来の人生の格差が違うからです。彼らの「勝つ」には「人生 3  
年・ 5 年捨ててもよい」という価値観があります。

日本人を“お人よしの海洋文化の単細胞”とすると、中国人は“大  
陸文化の複細胞”であると思います。それと中国には 5000 年の歴史  
もあり、且つ人も多いからであり平和な時代が余りにも少なく複雑  
な人間関係の中で生活したから生まれたという説もあります。チャ  
ンスに対する心構えが日本人より遥かに上なのです。

日本人の諺には“果報は寝て待て (よい知らせは静かに待ちなさい)”  
があるが、中国人は、チャンスは待つものではなく、“自分で掴 (つ  
か) むもの”という価値観があります。従って、自分にとって有利で

あれば、どんな狭いところからでも入り込んできます。

私は 30 代の後半に悟ったことがあります。人間の心の中に①見栄  
②無知③疑心暗鬼④嘘の要素があることです。

① 見栄に対しては“けじめ”で諭すべし。

社長であっても仕事以外で私的使用するお金は、企業の経費で処理してはならない。

② 無知に対しては“勇気”で諭すべし。

知らないことは知らないと言って、年下に教を乞う姿勢が王道である。経営者の能力判断は経営者の家庭の書棚の本をみて判断する。然るに立派な社長室で判断しない。

③ 疑心暗鬼に対しては、“愛情”で諭すべし。

童話の逸話など。

④ 嘘に対しては“正義”で諭すべし。

以上は“衣食足りて礼節を知る”の日本人には 90%以上通じたが  
現代中国人には全く通じないものと思慮されます。

中国人には“生論（中国人の生き抜き方の理論）”があるからです。日本人の武士道精神の“正論”は負けるかも知れないのです、無欲の愛で諭しても負けるのです。「武士道精神の限界？」やはり「世界的“世論”で諭すしか方策はない？」と思ったのも事実です。

しかし、武士道には道教が入っています。道教には“仙人志向道教”と“大衆道教”があります。一般の武士にとって“気持ちの切り替え”が非常に難しいが、「武士が漫才師を兼ねることが出来るか？」ということです。

「律儀な武士」と「愛される武士」の兼業ができれば、中国人との交流において、少なくとも「中国嫌悪・自己嫌悪」の精神的苦痛はなくなります。

金庸（きんよう、1924年6月6日 - ）は香港の小説家。香港の“明報”とシンガポールの“新明日報”の創刊者。武侠小説を代表する作家で、その作品は中国のみならず、世界の中国語圏（中華圏）で絶大な人気がある。

金庸の歴史小説“鹿鼎記 ルーディンジ”には中国人女性の“唯一主義（独占的嫉妬心）”にうまく対処したのが主人公“韋小宝 ウエイショウボウ”が登場する。（現在ドラマ化されて人気があります。私はこのドラマは主人公が異なるドラマを3回見ております。“韋小宝”は日本で言えば「遠山金四郎」の「花のお江戸の金さん」のようなドラマです。「奉行の金さん」に各ジャンルの美人チャンピオンが7人いたというドラマが“鹿鼎記”です。韋小宝は7人全員に愛されたのです。）

（康熙帝（こうきてい 清の第4代皇帝 1654年5月4日 - 1722年 在位60年）の時代、韋小宝は揚州で妓女の息子として生まれ、父親は漢民族かどうか分からない為なのか、あまり民族にこだわらない性格を持つ。旅先の北京で身を守るため宦官に化けて生活しているうちに、少年だった康熙帝と親友になり、ともに奸臣鰲拜（ローバイ）の肅清に協力し、以後は政治的にも信用を得て行く。また、鰲拜を殺害したことで、「反清（女真族）復明（漢民族）」の漢民族の復権を目的とする「天地会」にも認知され、青木堂の香主（幹部）にもなった。以後は二つ「親清と反清」の組織で板ばさみになるも、天地会のスパイとして、また康熙帝の親友として清朝で栄達していく。武術の腕はからっきしだが、話術と逃げ足だけに限定すれば抜群の才能があった。しかも性格が明るく、地位NO1 皇帝の妹・武術NO1・美人NO1・謙虚NO1・平凡性NO1・淡泊性NO1・「人柄NO1」の7人の妻がいた。中でも双児（シヨナル）は武術にも優れ小間使も兼ね「人柄NO1」の妻と思われる。韋小宝とともにロシアに赴き、中国とロシアの国境を決めるネルチンスク条約の締結に協力した。しかも韋小宝はロシアの皇女にまで愛されたというドラマです。）

従って、日本企業の経営者が中国と交流する時の成功の秘訣は芸能人志向の「専門学校」卒業者を担当にするのも一つの方策です。

中国の諺に「一人では龍になるが、二人寄れば豚になり、三人よれば虫になる」があると聞かされたことがあります。

当初私は意味が解らなかつたのですが、中国ビジネスをする場合、

「必ず仕事を任す人は最終的に一人にきなさい」という意味のよう  
です。

(平たく言うと、日本人施主が建物の建築を発注する場合、「誰に注文しようかな」と迷った場合、結論は「最初の人に注文きなさい」という事です。但し「競争見積もりは取りきなさい」という事です。更に施主は負けた人には丁寧に寸志でいいから挨拶に行きなさいという事です。これが日本人の平和を願う武士道であります。中国には表面的には競争入札であるが結果は最初に決まっているということです。)

中国人には日本の“終身雇用制度”が理解できないし、会社への“忠誠心”が少ないと言えます。日本人のように“結婚したら添い遂げる”、“墓場まで遺骨が同じ場所にある”という価値観がないのです。

中国人は夫婦別姓が基本ですからそれぞれの家族の墓に遺骨が埋められることが多いようです。

中国人を雇用する場合、雇用契約はプロ野球の選手契約のよう(基本料金と成功報酬)にすることを勧めいたします。投手雇用契約・捕手雇用契約・・・。

中国人にとっての人間関係の判断の第一は干支(えと)であることが多いようである。龍が一番である。干支(えと)の蛇は“小龍”といい、“龍と蛇”の仕事がうまく行くパートナーの干支(えと)は“鶏”である。“鶏”の最高は“鳳”であり“龍鳳 ロンフォン”は、中国人にとって一番いい人間関係なのだ。日本で言えば下請けは“1業種 1社=1者=龍”の価値観である。

反対に日本には“三本の矢”の例えがあります。戦国武将の一人である毛利元就が三人の男の子に「一本の矢はすぐ折れるが、三本になると折れない。だから兄弟三人が力を合わせれば毛利家は滅び

ない」と教えたという逸話であります。毛利家は徳川（江戸）時代を生き抜き明治維新に貢献しました。“三本の矢”は親が子供達に「最終的に家名を存続するには兄弟仲良くしなさい」と諭す場合に用いられる“教訓”であって“諺”ではありません。

私の本業での事ではありますが、父親は会社の社長であり、三人の子供がいる。現在、長男・次男・三男と生まれる年度で位が区別されているが、次男が長男より優秀、三男が次男より優秀であった場合「後継社長を誰にするか」と悩む社長が時々相談に来ます。私の答えは長男であります。「最初の社長は長男、長男が次男に社長を譲り、次男が三男に社長をゆずると、最初の長男も次男も家族が安心して世界旅行ができ、引退後平和な人生が送れる」というのが、通常の私が行うカウンセリングであります。

また私は、抜群のセンスと能力を持ちながら、危機管理能力がやや劣る為に企業の出世競争に脱落した数多くの“仕事ができるサラリーマン”も見てきました。

（塚原卜傳（つかはら ぼくでん、塚原卜傳、1489年－1571）は日本の戦国時代の剣豪、兵法家である。土佐入道。父祖伝来の鹿島古流に加え、天真正伝香取神道流を修めて、鹿島新当流を開いた。塚原卜傳は後継者に悩んだ挙句、まず三男を呼ぶ。三男が襖を開けるといきなり上から物が落ちてきたので、三男は剣で物を切り落とし「父上およびですか」と言った。次は次男が襖（ふすま）を開けると同じように上から物が落ちてきたのに対し、次男は刀を使わず身をよけ「父上およびですか」と。最後に長男が襖を開け前に上の物を取り

外して「父上およびですか」と言った。塚原ト傳は危機管理NOIの長男を後継者にしたのである。)

中国が2001年WTOに加入しましたが、その歴史はまだ10年弱です。国際法が中国政府にも解かっています。仮に解かっている国内事情でそう振舞っているだけなのかも知れません。

中華思想の国策優先主義の現れであります。経済がアメリカに追いつく迄は、国も「諦めない、執着心が凄い」を貫くのです。

中国は、まるで古代バビロニアのような多民族国家であります。古代バビロニアは、当時の世界で最も進んだ文明国家ですが、ハムラビ法典のような“目には目を、歯には歯を”のような“叩かれたら、叩き返せ”の中華思想がありました。

現在中国共産党の高層部・上層部の子供達が世界に留学しています。時々親が留学先に子供を訪ね、自ら国際ルールを学んでいる最中なのです。民主的共産主義への移行の過渡期であると考えます。

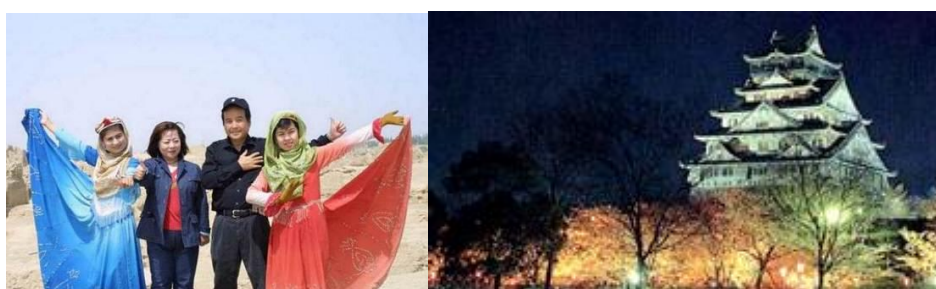
また話が飛ぶが、中国人の男性が一旦女性を好きになると、あらゆる手段で女性にプレゼントをします。嫌われても、嫌われてもプレゼントするのです。中国男性は“能力以上の征服欲”、中国女性は“能力以上の独占欲”が存在するのです。そして、征服と独占の後は愛した人を放置するのであります。

日本人には、結婚にはその人の将来に期待しつつ、親の意見に従って自ら身をひくという価値観があります。女性が「愛する人の将来の栄達を望み悲しいが引き下がる。」この価値観こそ日本人女性の最大の愛であると思います。自分の能力、両家の資産格差が有るとき、日本人女性はそういう決断をすることがあります。それが日本の古い習慣であり、日本女子に於ける武士道精神であります。寧ろ中国農村部や中国少数民族地域にはそういう封建主義が残っていると観測しております。

私は、たまたま中国人通訳とカシュガルでウイグル族の子供に中国語を教えている20歳の明るい美人の先生（ウイグル族）と出会ったことがあります。彼女から「お父さんは非常に子供の躾（しつ）けに厳しいが、母は理解がある」と聞きました。

彼女は、（私が日本人で中国語を話せると知ると）「日本人の若い男性を紹介して欲しい」と言いました。また「必ず日本語を習得し夫と夫の両親につくしますから」とも言いました。但し条件として、日本人の若い男性が両親の前で土下座して、中国語で「結婚したい」と言うこと、そうすればウイグル族の父は許すというのです。「大阪城の女性は美人」という中国語の歌があります。中国の大阪城とは中国ゴビ砂漠にあります。

（写真右が日本の大阪城）



2010/10/24 2010/11/23